コロナ禍における自然体験活動の取り組み

宮　野　純　次

はじめに

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行により、人々の活動自体が制限される中、本物に触れるなどの自然体験活動の機会が減少していることも課題となっている。様々な人々と関わり、地域の人材とも連携しながら、自然体験活動を実施していくことのすばらしさや大切さを、活動が制限されたコロナ禍において改めて痛感することになった。活動がほとんどできなかった2020（令和２）年度は、これまで筆者が実践してきた自然体験活動における地域の人材との連携や関連する全国の人々との繋がりを振り返りながら自然体験活動の実践について論考した。

新型コロナウイルス感染症によって行動制限という後ろ向きの変化を余儀なくされたが、コロナ禍だからこそ生まれた取り組みも存在する。本稿では、2021（令和３）年度以降も続くコロナ禍において模索しながら取り組んだ自然体験活動について考察する。

１．全国ネイチャーゲーム研究大会における活動

子どもたちの感性を自然体験活動・環境教育活動で広げているネイチャーゲームの実践活動について調査･研究を深めるために､継続的に全国ネイチャーゲーム研究大会や研修講座等に参加している。全国ネイチャーゲーム研究大会は、全国にある都道府県シェアリングネイチャー協会が持ち回りをしながら、年１回、５～６月頃に２泊３日で開催している大会である。大会テーマの設定から、受け入れ準備、開催地の自然や文化、人材を生かしたワークショップなど、地元のネイチャーゲームの仲間たちが、１年以上の時間をかけて準備して

いる。しかし残念ながら2020（令和２）年度の研究大会は、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、中止となっていた。

2021（令和３）年度の研究大会に向けて、３年前に運営委員会を立ち上げていた神奈川県シェアリングネイチャー協会では新型コロナウイルス感染症の収束について依然先が見えない中、「現地での開催が無理ならできる形で実施しよう！」とオンラインでの開催へと舵を切った。

「第31回　全国ネイチャーゲーム研究大会 from 神奈川」は、2021（令和３）年６月５日（土）～６日（日）の２日間、オンラインという新しいカタチで開催された。コロナ禍で各種講座やイベントが中止になる中、「オンラインでもできるもの」「オンラインだからこそできるもの」など、今までとは違ったカタチでのシェアリングネイチャーが提案されている。「全国の仲間が神奈川で出逢い、いろいろな場面で触れ合い、研究大会という名に相応しく、お互いに学びあえるもの」と言うことで、神奈川大会のテーマは「出会う・ふれあう・学びあう　いいじゃん神奈川～みんなで創ろう､新しいカタチの全国研究大会～」となっている。

ネイチャーゲームは、1979年にアメリカのナチュラリスト、ジョセフ・コーネル（Joseph Cornell）氏により発表された活動であり、見る、聞く、触れる、嗅ぐなど、私たち１人ひとりが持っている感覚を使って、自然を楽しみ、自然と仲良くなることができる活動である。ネイチャーゲームを体験することで、いのちを大切にする心が育まれる。

2021（令和３）年度の研究大会では、ネイチャーゲーム創設者のジョセフ・コーネル氏の講演に加えて、ゲストスピーカーのグッレグ・トレイマー（Greg Traymar）氏による講演も行われた。オンラインツールの Zoom を活用し、国内外の地域間でのリアルタイムな交流となった。

（１）ジョセフ・コーネル氏の講演

コーネル氏は、“The Essential Ingredients that Infuse Flow Learning with Power.”（フローラーニングをエネルギーで満たす不可欠な要素）をテーマに

執筆中の「手法としてのフローラーニング」をもとに講演され、「如何にしたら深い自然体験が出来るか、そしてその体験により、その人自身が内側から変化していく姿」などを、熱く語られた。コーネル氏の講演は、一種の「体験」のようにも感じられた。表情や話の「間」などのコーネル氏のつくり出す雰囲気や、全国の方々が同じ場を共有しているという実感が伝わってきた。「まずは自然と直接つながること」「外から型を押し付けるのではなく、体験によってその人自身の内側から変化していく」といったお話があった。

また、「状態」の大切さ、フローラーニングについて、イメージしやすい例え話も興味深かった。活発な「カワウソ」のアクティビティの最中であっても内面は静かな（calm）状態、という言葉がとても印象的であった。知識だけではなく内面からの変化ももたらす、そのような時間であった。

（2）グレッグ氏の講演

グレッグ氏は、“The importance of filling our life and teaching with inspiration from nature.”（自然からのインスピレーションで、人生や指導を満たすことの大切さ）をテーマに「自然からのインスピレーションで、美しさに満たされている時に、生き生きとして創造性が溢れ出る」などについて語られた。地位や名誉、そして愛する家族、生活に必要な十分なお金を手に入れているにも関わらず、何か物足りなさを感じていた人が、ある時足りないものが「よろこび」であることに気がついた例をあげ、深い自然体験によってもたらされる、まさに一瞬を生きる深い喜びについて説明された。

シェアリングネイチャーは意識を「今、ここ」に維持する活動を目指している。多くの人は素晴らしい自然体験を一回きりで終わりにしてしまうが、自然そのものを感じるためには意識的に繰り返し、自然を感じる必要がある。そのためのコツは、①エネルギーを動かす（体を動かす、熱意を呼び起こす）、②自然の中で静かな時間を持つ、③自然からもらったインスピレーションを多くの人とわかちあう、④自然の存在を毎日感じる、ことである。これからのシェアリングネイチャー活動の視点や意義などに影響する貴重な講演であった。

（3）ワークショップ

ワークショップはすべてオンラインでの提案であったが、一方通行型の提案ではなく参加者が「主体的」に関われるようなプログラム構成になっていた。

ワークショップの内容は、「A：オンラインで海にふれよう感じよう～海からの贈り物みーつけた！～」「B：キラキラえがお、小さな子どもたちのセンスオブワンダー～3歳から5歳向けネイチャーゲームわくわくアレンジ～」「C：やってみよう！ SDGsネイチャーゲーム～暮らしをみつめ地域実践へつなげよう～」「D:オンラインで広がるネイチャーゲーム～今だからこそ、やってみよう！～」「E：荒崎からの贈り物～海と大地がつながる場所で生まれたアイディアの原石～」「F：直送！城ヶ島の謎の石～再発見！色と形のネイチャーゲーム～」である。

これまでに行われていたコロナ禍前の対面によるワークショップの場合は、参加できるのは1つだけであったが、オンラインによる提案である今回は、後日の録画視聴も可能で、観たい！と思えば、全部のワークショップをのぞいてみることもできる構成になっていた。以下、A～Fの6ワークショップの内容について概観する。

A　オンラインで海にふれよう感じよう～海からの贈り物みーつけた！～

初夏の賑やかな磯の映像でスタートして、由比ガ浜に漂着したクジラの話から、神奈川県のプラスチックごみゼロ宣言について紹介されている。ワークショップ参加者は、家にある「海から来たもの」を持ちながら自己紹介することで、海の幸、宝物、漁具プラスチック、ビーチグラス、農業肥料など海に関連する会話が広がっている。事前に送られてきていた様々な色・模様・形をした貝の写真集の資料を参照しながら、グループで自由に感性を重ね、読み札作りを実践し、参加者全員によるカルタとりへと展開している。その際に、じっくり貝を見ることにより、どれもがとても印象深いものへとなっていた。最後はフリートークで海の活動体験談、海への想い、ビーチクリーンとのコラボ案、海洋汚染の現実など、海への関心が深められていた。

B　キラキラえがお、小さな子どもたちのセンスオブワンダー～3歳から5歳向けネイチャーゲームわくわくアレンジ～

幼稚園における『木の葉のカルタとり』の実践事例が紹介された後、「3歳児がネイチャーゲームを楽しむにはどうすれば良いか」、工夫・導入や言葉かけ・準備について、5つのゲームの中から、各自が話し合ってみたいゲームが選ばれ、グループにわかれて話し合いが行われている。その後、グループをシャッフルして、別グループでこれまでの話し合いをシェアする時間も設けられていた。 参加者1人ひとりが主役となり、実践に向けてのアイディアを出し合い、わかちあうことへと繋がっている。その際、実践の経験が豊富な方から話を聞く機会も持たれていた。

『ねむの木保育園』園長による「5歳児と『わたしの木』」という提案の中で保育園での実践が紹介され、アクティビティを『わたしの木』に限定したグループワークが行われている。ねらいを外さずに行うことの大切さや5歳児同士で行うための導入の工夫や安全面などについて話し合われていた。5歳児が木に親しみ、大切にしようという気持ちを育むために、そして『Meet a tree』に夢中になるためには、段階が必要であること、そこに至るまでの準備や経験を積むこと、安全面では必ずしも目かくしは重要ではなく、色々な方法があることなど、多くの貴重な意見が出されていた。

C　やってみよう！ SDGsネイチャーゲーム～暮らしをみつめ地域実践へつなげよう～

アクティビティ体験では、フィールドビンゴと宝さがしを合わせたような「SDGsネイチャーさんぽ」で身近な自然への気づきをSDGsにつなげ、さらに〈カモフラージュ〉でプラスチックゴミについて考えている。ここでは、小さい「人工物」も参加者が次々と見つけ出し、「えっこれも？」とビックリしたり、「さすがネイチャーゲーム指導員！」という一幕もみられた。そして最後に、SDGsをテーマにしたネイチャーゲームについて小グループごとに考えている。素晴らしいアイディアが次々と出てディスカッションが充実した結果、

急きょ時間が延長され全グループの発表へと変わっていた。そのあと全員が今日から行動することを１つ決めた「マイ SDGs 宣言」をして、締めくくられていた。

D　オンラインで広がるネイチャーゲーム～今だからこそ、やってみよう！～

全国研がオンライン開催になり、各担当者がそれぞれのワークショップをオンラインで実現することに苦心する中、オンラインを手段としてではなく、主役に捉え、ネイチャーゲームの楽しさを倍増し、ネイチャーゲームを広げる可能性を提案する時間と考えられていた。 事前に、「さがみのネタ（かおりの素）」を参加者に送ることから、ワクワク感が演出され、当日の〈ノーズ〉〈音いくつ〉〈かおりのしおり〉で、参加者と神奈川が一気につながれた。北海道から沖縄まで、文字通り全国からの参加者（38名）をそれぞれの場所は違っても、『同じ時を過ごす』仲間へと変えることができていた。

今回のオンラインでネイチャーゲームは、参加者に同じ香りのものを郵送して、参加者が同じ香りを共通で認識して〈かおりのしおり〉を行う、というところがポイントになっていた。香りをテーマとして、離れていて、同じ場所にいない人たちがどうやって香りを共有できるか、という点がこのオンラインでネイチャーゲームのアクセントであった。

E　荒崎からの贈り物～海と大地がつながる場所で生まれたアイディアの原石～

最初にビデオ会議システムに慣れることも兼ねたアイスブレイクの後に、ハマの自然が磨き上げてきたアイディアの原石の体験・紹介が行われている。まずは音に乗って旅をする「目かくし音旅」に出発する。旅の後は、ヨガで目や頭をリラックスさせ、「潮だまりの窓」から見える世界に浸っていた。その他「小さなミルフィーユの世界」「時の映画館」「サウンド巻物」など、荒崎から得た粗削りのアイディアの原石が紹介され、これらのアイディアの原石、あるいはワークショップ中に新たにひらめいたアイディアをどのように磨いてみたいかなどが参加者によって話し合われ共有されていた。

F　直送！　城ヶ島の謎の石～再発見！　色と形のネイチャーゲーム～

北海道から沖縄・石垣島まで、全国各地からの参加者（26名）には城ヶ島の石が事前に直送されている。日常から遥か遠くの存在だった城ケ島が、事前に送られてきた城ケ島の石に触れながら色と形のネイチャーゲーム体験をすることにより、大切なシェアリングネイチャーサイトへと変化するように工夫されていた。途中、ネットワークが途切れたりするアクシデントもみられたが、なんとか乗り越え、最後は「城ケ島の雨」の歌で終わっていた。

オンラインを手段としてではなく、主役に捉え、ネイチャーゲームの楽しさを倍増し、ネイチャーゲームを広げる可能性が提案された今までにない新しいカタチでのワークショップとなっている。事前に同じ香りのするものや触って実感してもらいたいもの、観察のための資料などを送ったり、オンライン上で準備された音や映像を一緒に体験したりするなど、対面でなくても五感を刺激しながら、参加者が共通に体感したり認識したりする可能性が拡がっている。これらの実践は、今後の地域の会におけるオンラインイベントなどにも役立つことであろう。対面での リアルな集まりはできなくても、アメリカのコーネルさんや日本全国の仲間と繋がることはできる。また、オンラインでの参加は、人の移動を伴わないため、これまでよりも講演者や参加者を増やすことも可能である。たとえ目の前にはいなくても、画面の向こうにいるシェアリングネイチャーの仲間とは〈感覚の輪〉を広げて会うこともできる。コロナ禍においても、全国の仲間が心を寄せ合い、絆を深める場が創られていた。

地域実践でも活用できる内容の試みとして、6ワークショップの中には、「海」「山」「川」「街」のテーマでの設定や「子どもたちはキラキラした感性をもっている。周りに伝える術を知らないだけで、ちょっとだけ手助けをしたら、その感性はもっと花開くでしょう」などと子どもたちの感性を引き出し、伝えることができるようなワークショップも設定されていた。また、夜には「好きな話題で話し合う」カフェタイムも交流の場として用意されていた。

さらに、神奈川大会では新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い中止となっていた前年度の全国研究大会のための枠「秋田 TIME 2020」も設けられ、秋田大会テーマであった「ブナの森に抱かれて」がオンラインで映像と共にそのエッセンスが紹介されていた。

「できない」と諦めるのではなく、「できることをやろう！」といった神奈川県シェアリングネイチャー協会の前向きな気持ちが、この大会を実現し、約180名がオンライン上で集うことができた。「できない」と諦めずに、今こそ「できること」を試行錯誤しながら実践していくことが大切である。

2．ジュニア自然大学「こどもゆめくらぶ」における活動

ジュニア自然大学「こどもゆめくらぶ」は、「学校の土曜休日並びに地域での総合学習に対応する事業として、自然とのふれあいと協働作業を通じ、環境学習と子どもたちの『生きる力』を養う」という目的で、大阪府豊中市の服部緑地公園の一角にある「日本民家集落博物館」内の自然や畑、茅葺き（かやぶき）の民家を主な活動場所として、2002（平成14）年４月に開講している。筆者も初年度からこの「こどもゆめくらぶ」での活動に関わっている。

19年目の2020（令和２）年度は、新型コロナウイルス感染症が全国的かつ急速にまん延しつつあった。そのような状況の中、４月からの活動へ向けて準備が進められていたが、地域の感染状況を考慮して、開講式は例年より遅い４月下旬に計画された。しかし、４月７日に緊急事態宣言が発出されるなどコロナ禍が収束しない状況を踏まえ、こどもたち・保護者・リーダーや地域の人々の健康・安全を第１に考えて、第19期の「こどもゆめくらぶ」は中止された。

地域の感染状況が推移する中、翌年の2021（令和３）年１月には第２回緊急事態宣言が発出され、その期間が延長された後、３月21日には一旦終了した。2020（令和２）年度には中止していた「こどもゆめくらぶ」も保護者からの強い要望もあり参加者を20名に減らした形で開講の準備が進められ、５月１日（土）の開講式が計画された。しかし、４月23日に第３回緊急事態宣言が発出

され、計画変更を余儀なくされた。その後、延長されていた大阪府の緊急事態措置を実施すべき期間も６月20日には終了した。それに伴い、９月４日（土）開講式、12月11日（土）修了式の全９回での実施が再度計画された。しかし、８月２日には緊急事態措置を実施すべき区域に大阪府も追加され、９月30日まで緊急事態措置が延長された。コロナ禍が続く中、2021（令和３）年度の第20期の「こどもゆめくらぶ」も中止せざるを得なかった。

その後、新規感染者数は減少傾向に転じたりしたが、2022（令和４）年１月には新規感染者数が急速に増加し、同年１月９日以降、一部の都道府県において、まん延防止等重点措置が実施された。その後、多くの地域で新規感染者数が減少傾向となり、３月21日をもって、全ての都道府県でまん延防止等重点措置が終了した。

2022（令和４）年度の第21期の「こどもゆめくらぶ」は、参加を希望しながら２年間待つ形になった４、５年生中心に定員を半数に減じた子ども20名で再開されている。第１・３土曜日（全16回）に開講される2022（令和４）年度のプログラム内容は、次の通りである。

① 4/23　開講式、班編成（自己紹介）・竹の不思議と利用、タケノコの観察（各班で）継続、竹のお椀とお箸づくり、ノコギリ・小刀の使い方、名札・班旗の作成

② 5/7　初めての畑〈夏野菜の植付け〉〈落花生の発芽観察用鉢植え（竹製）・移植する〉、野菜の不思議

③ 5/21　サツマイモの植え付け、トウモロコシの植え付け、夏野菜の観察と世話・スケッチ、民家（昔のおうち）探検めぐりスケッチ、蚕のお話〈蚕を育てる〉観察の仕方（継続）、紐結びの練習（各班で）

④ 6/4　タマネギの収穫と保管、タマネギの不思議、夏野菜の世話（支柱たて･結び方）、落花生の植え付け、自然観察の仕方、虫眼鏡･ルーペ〈顕微鏡〉、春の館内樹木・草花観察

⑤ 6/18　ジャガイモの話と収穫・試食（味比べ）、夏野菜の花の観察・収

穫と試食、初夏の自然観察（館内の樹木や草花など）

⑥　7 / 2　野菜の生育と土・水・光・肥料の役割、夏野菜の収穫と試食、夏野菜の葉の観察と役割、民家の暮らしと体験（曲家・椎葉）、蚊帳・昔の掃除体験・昔話や昔のあそびなどの体験）、昔のおやつ作り・試食、観察タケノコの成長

⑦　7 /16　夏野菜の収穫と畑作業、「野菜の不思議」の話、蚕の繭つくりの話、水鉄砲作

⑧　8 / 6　夏野菜の収穫と畑作業、夏野菜の観察・収穫・味わう、夏祭りの計画（班での話し合い）、昆虫の観察

⑨　8 /20　楽しいミニ夏祭り、たっぷり夏野菜を味わう、夏野菜の収穫と畑の耕しと整備、おやつ作りとお店やさん大会

⑩　9 / 3　ダイコン・タマネギの種蒔き、ダイコンの話、夏野菜の最後の収穫と撤去作業、こども環境会議

⑪　9 /17　泉原の里山体験（親子参加の合同バス遠足）、本物の畑とジュニアの畑との比較

⑫　10/ 1　ダイコンの間引きと土寄せ、秋野菜の話、糸つむぎ（綿や蚕の繭から糸をもらう体験）

⑬　10/15　秋の自然観察（都市緑化植物園で秋の季節の実感）、笹船作りとネイチャーゲームなど

⑭　11/ 5　サツマイモの収穫、サツマイモの不思議、ソラマメ・エンドウ豆の種蒔き、こんにゃく作り（こんにゃく芋から作る体験）

⑮　11/19　里芋・落花生の収穫、タマネギの植え付け（野菜の不思議とつくり）、生き物は冬支度、不要な古布を利用して手作り織物体験

⑯　12/10　修了式、民家思い出めぐり・お餅つき、道具整理・畑に感謝・大鍋作り、ダイコンの収穫（持ち帰り）

2022（令和４）年度の「こどもゆめくらぶ」では、毎回、健康観察・体温測定・手指消毒・マスク着用など、できることすべて徹底しながら自然体験活動

を実践することが心掛けられていた。その結果、誰一人も感染することなく過ごすことができていた。天候にも恵まれ、すべて外での活動であったこと、こどもの人数もいつもの半分で少人数であったことなど、ゆとりをもった対応がなされていたことも幸いであった。

また、プログラムについてもほぼ予定通りに進めることができていた。熱中症にも気使いながら夏祭りも縮小して開催された。里山体験も９月に茨木の里山で、自然観察や虫取り・畑の収穫や大根の間引きなどの体験が行われた。コロナ禍のため延期になり、2年間も待って参加された保護者の熱い思いと理解・協力のおかげでもあった。保護者へのアンケート結果からもコロナ禍の中でも実施できて良かったことが読み取れる。その一部を紹介する。

＊２年待って本当に良かったです。こどもが参加するたびに「楽しかった！」「今日は、あれしたよ。これしたよ」と話してくれることが楽しい夕飯の会話になってました。（中略）大阪に住んでいながら、こんなにも沢山の自然体験をさせてもらえて感謝でいっぱいです（自然体験は、遠いところへ行かないと出来ないものだと思い込んでいたところがありました）。

＊教えていただいたことをこちらにも教えてくれる。採りたての野菜の美味しさを知り、味が全然違うと言っている。

＊虫を触れるようになった。学外のお友達ができたこと。異年齢の人と交流が持てたことで自信につながりハキハキと人と話せるようになった。

＊多彩な活動内容が盛りこまれていて、大満足のプログラムでした。皆さんと顔見知りになることができ、人数もちょうどよかったと思います。

＊家や学校以外の多世代の方々とかかわりたくさん可愛がっていただいて本人もとても満たされた思いです。

このように、子どもたち、シニア世代のリーダー、学生サブ・リーダーといった多世代が交流する中で、自然体験活動が実践されている。一緒に体験することで驚きや発見が共有され、相互に影響を与え合うことに繋がる。工作が得意、

野菜作りが得意、身近な自然観察が得意、料理やおやつ作りが得意など、多様な人材が関わることで、子どもたちが体験する内容が幅広く豊かになっている。地域の人材と連携することで、多世代が交流する継続的な活動へと繋がっている。コロナ禍はまだ完全には収束していないが、参加人数を絞り、感染防止対策などを丁寧に実施しながら、この連携した活動を継続していくことが大切である。

3．本学の「京女の森」並びに「京女　鳥部の森」における活動

2020（令和２）年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、大学における前期授業は対面形式ではなく、オンライン授業に置き換えられた。後期になり対面授業も実施できるような状況への変化を踏まえ、11月上旬に「京女の森」での自然体験活動を計画したが、悪天候と重なり中止せざるを得なかった。奥山に近い里山である「京女の森」は、ダイナミックな自然体験が可能であるが大学から距離があり車での移動が必要なため、頻繁に行くことは難しく、2020（令和２）年度は再度計画し実施することはできなかった。

2021（令和３）年度は、対面授業でスタートしたが、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴って前期の途中からはオンライン授業に、そして後期には再び対面授業へと状況が変化した。秋晴れの好天に恵まれた11月上旬には、感染症防止対策を考慮しながら「京女の森」での自然体験を実施することができた。当日は京女の森に隣接している京都市の市有林でスギの伐採が行われていたため、通常の観察コースとは逆回りにコースを歩いて自然体験をした。最初に耳を澄ませて、周りから聞こえてくる音をじっくりと聞くネイチャーゲーム「音いくつ」を実施した。その後､五感を働かせながら「フィールドビンゴ」を行った。フィールドワークでは実際に植物に触れ木肌や葉の違いを実感し、共感したり、共有したりしながら自然と触れ合う体験を実施した。

2022（令和４）年度は、基本的に対面授業が実施されている。５月下旬には自然豊かな「京女の森」で自然に触れる体験を実践した。天候にも恵まれ、青

空のもとでネイチャーゲームもしながら自然の中を散策した。尾根コースや林道コースにおいては五感を使いながら自然と触れ合い、森の働きや生物の営みについて実感を伴った活動をすることができた。そして、11月中旬には秋の「京女の森」での自然体験を実施した。曇り空の下、活動を開始したが途中小雨が降る中での活動になった。小雨の中での活動は、晴れた日には見ることのできない、しっとりとした自然の様子を観察する体験となった。

一方、大学に隣接している「京女　鳥部の森」では、対面授業が可能となった2021（令和３）年度の後期に、ネイチャーゲーム体験と共に、ナナカマド、ヤマザクラ、タマミズキの紅葉やコシアブラ、タカノツメの黄葉など秋の自然を観察することができた。また、年度末の３月にはネイチャーゲーム課程認定校として３年ぶりに本学でネイチャーゲームリーダー養成講座を開催することができた。大学構内でのネイチャーゲーム体験に加えて、より自然度の高い豊国神社境内や「京女　鳥部の森」においてもアクティビティを体験している。

そして、2022（令和４）年度は季節ごとに「京女　鳥部の森」で自然体験をしながらネイチャーゲームも実践している。７月下旬に３年ぶりに開催された京都府シェアリングネイチャー協会の総会前には、ネイチャーゲームの指導員（リーダー）が集まって、豊国神社境内や「京女　鳥部の森」において、自然体験のアクティビティを実践し交流を深めることができた。

おわりに

自然体験活動に際して、オンラインツールのZoomを活用し、国内外の地域間でのリアルタイムな交流を実践するなど、新たな取り組みも始まっている。対面での リアルな集まりはできなくても、海外や日本全国の仲間と繋がることはできる。事前に体験するものを送ってもらうなど、コロナ禍の中で発達したオンラインツールと実体験とのハイブリッドな体験活動の可能性も拡がっている。感染防止対策と自然体験活動を両立できるように試行錯誤しながら、各種の関連する団体や地域の会と連携し、安心で安全な体験活動を実施すること

はますます大切である。自然体験活動では、三密を回避しソーシャルディスタンスを確保することで充実した活動が行える。

コロナ禍はまだ完全には収束していないが、感染状況に応じて柔軟に感染対策が選択できるように変化してきている。コロナ禍による様々な制約を受け入れながら「できない」ではなく、コロナ禍こその自然体験活動のあり方を模索し、「できること」を試行錯誤しながら、充実した自然体験活動の実践へと繋げていきたい。

文献

中央教育審議会（2013）今後の青少年の体験活動の推進について（答申）平成25年１月21日

第21期（2022年度）ジュニア自然大学カリキュラム（本科）2022年活動テーマとねらい　2022. 4. 9 資料

第21期（2022年度）ジュニア自然大学カリキュラム（本科）アンケート〈集計結果報告〉　2022.12.17 資料

ジョセフ・B・コーネル著、吉田正人・辻淑子・品田みづほ訳（2003）『ネイチャーゲーム１』改訂増補版　第３刷、日本ネイチャーゲーム協会

ジョセフ・コーネル著、吉田正人訳（2016）『空と大地が私に触れた』日本シェアリングネイチャー協会

ジョセフ・コーネル著、吉田正人・辻淑子訳（2013）『シェアリングネイチャーゲーム　自然のよろこびをわかちあおう』日本シェアリングネイチャー協会

閣議決定（2018）「環境保全活動、環境保全の意欲の増進及び環境教育並びに協働取組の推進に関する基本的な方針」平成30年６月26日

公益社団法人日本シェアリングネイチャー協会（2014）『公認ネイチャーゲーム指導員録　自然案内人2014年度版』日本シェアリングネイチャー協会

公益社団法人日本シェアリングネイチャー協会（2015）『ネイチャーゲーム指導員ハンドブック　第７版―理論編―』日本シェアリングネイチャー協会

京都女子大学・京都女子大学短期大学部編（1995）『尾越のいのち―尾越山林環境調査報告書』京都女子学園

京都女子大学生命環境研究会（2011）『京女鳥部の森　散策マップ』京都女子大学生命環境研究会

宮野純次（2016）「自然体験型環境教育―身近な自然体験から行動へ―」能條歩編著『人と自然をつなぐ研究　ネイチャーゲーム大学講義録』公益社団法人日本

シェアリングネイチャー協会、pp. 151-174
宮野純次（2017）「地域の自然を活用した自然体験と環境教育の取り組み(1)」『京都女子大学宗教・文化研究所研究紀要』第30号、pp. 49-60
宮野純次（2018）「地域の自然を活用した自然体験と環境教育の取り組み(2)」『京都女子大学宗教・文化研究所研究紀要』第31号、pp. 51-61
宮野純次（2019）「京都の自然を活かした自然体験と環境教育の推進(1)」『京都女子大学宗教・文化研究所研究紀要』第32号、pp. 37-49
宮野純次（2021）「京都の自然を活かした自然体験と環境教育の推進(2)」『京都女子大学宗教・文化研究所研究紀要』第34号、pp. 101-118
宮野純次（2022）「自然体験活動の実践と人々との繋がり」『京都女子大学宗教・文化研究所研究紀要』第35号、pp. 41-54
宮野純次・高桑進（2007）「体験型環境教育プログラムの調査と研究(1)」『京都女子大学宗教・文化研究所研究紀要』第21号、pp. 63-72
宮野純次・高桑進（2008）「体験型環境教育プログラムの調査と研究(2)」『京都女子大学宗教・文化研究所研究紀要』第22号、pp. 1-15
文部科学省（2002）「第１章　体験活動の充実の基本的な考え方」『１．体験活動事例集―豊かな体験活動の推進のために―』
文部科学省（2008）「1. 2. 体験活動を効果的に行うポイント」『体験活動事例集―体験のススメ―［平成17、18年度　豊かな体験活動推進事業より］』
文部科学省　総合教育政策局　地域学習推進課（2022）『指導者必見！　コロナ禍でも安全安心自然体験 GUIDE BOOK』
青少年の体験活動の推進方策に関する検討委員会（2016）「青少年の体験活動の推進方策に関する検討委員会」における論点のまとめ　平成28年11月
新型コロナウイルス感染症対策本部（2021）新型コロナウイルス感染症　緊急事態宣言の実施状況に関する報告　令和３年10月８日
社団法人日本ネイチャーゲーム協会編（2004）『ネイチャーゲーム指導員ハンドブック　第６版―アクティビティ編―』ネイチャーゲーム研究所
社団法人日本ネイチャーゲーム協会編（2005）『ネイチャーゲーム指導員ハンドブック　第６版―理論編―』ネイチャーゲーム研究所
全国ネイチャーゲーム研究大会 from 神奈川
http://site.wepage. com/ kanagawa- naturegame/page1（参照2021-08-31）
全国ネイチャーゲーム研究大会 from 神奈川
http://site.wepage. com/ kanagawa- naturegame/page2（参照2021-08-31）
全国ネイチャーゲーム研究大会 from 神奈川〈記録動画視聴・参加者専用ページ〉
http://site.wepage. com/ kanagawa- naturegame/page5（参照2021-08-31）

受付日　令和４（2022）年10月１日　　採用日　令和４（2022）年12月25日

<キーワード>
自然体験活動　コロナ禍　体験型環境教育　ネイチャーゲーム